啓蒙思想とフランス革命

(1) 最近の研究史から[1]

山崎耕一

I. はじめに

本稿は，啓蒙思想とフランス革命の関係を取り上げた最近の研究を，ロバート・ダーントンを中心に紹介し，最後に，その紹介を踏まえた上での我々の今後の研究方向を展望しようとするものである。「啓蒙と革命」といえば，常識的には，啓蒙思想がフランス革命を準備した，ないしは啓蒙思想の理念がフランス革命を導いたということになっており，ダニエル・モルネの『フランス革命の知的起源』[2]がその点を実証的に示した古典的大著であるとされている。一例をあげると，イギリスのクリストファ・ヒルは，その『イギリス革命の思想的先駆者たち』[3]の冒頭で「私は，本書の題名から，ダニエル・モルネの『フランス革命の知的起源』という書物を想起して頂きたいと思う。モルネ氏は，この著書の中で，モンテスキュー，ヴォルテール，ディドロ，ルソーについて論じているが，彼らの及ぼした知的な影響は，歴史家がフランス革命を解釈しようとする場合，一致して認めるところである。彼のその題名を見るたびに，私はなにか挑戦されているように感じてきた」[4]と述べて，モルネが明らかにしたのはモンテスキューなどの大思想家が及ぼした影響であると捉え，またそうしたモルネの研究が直接の刺激になったことを認めている。確かにモルネのこの本は，第一篇が 1715 年から 47 年までで「闘争の端緒」，第二篇が 1748

年から70年頃までで「決定的闘争」，第三篇が1771年頃から87年までで「勝利への道」となっており，18世紀を通じて啓蒙の理念が次第に人々の間に普及していく有り様をいきいきと描いている。しかしモルネは同時に二つの重要な保留を用心深くつけ加えている。すなわち，啓蒙思想家たちがもっとも重視したのは信仰の自由，言い換えれば教会の権威からの解放であって，政治や経済の思想は大変に穏和ないし保守的であること，および啓蒙の思想と革命の理念の間には隔たりがあって，両者を一直線に結びつけることはできないことである(5)。この保留は我々にはたいへん重要だと思われる。なぜなら，これから紹介する最近の研究はいずれもモルネを意識し，その見解を批判することをめざしているのであるが，ある意味ではモルネが保留した点を拡大して強調したという要素もあるからである。それにしても，モルネの基本的関心は，啓蒙の大思想が「中心」から「周辺」へ，すなわちパリから地方へ，また大思想家から通俗作家や読書人を経て一般庶民へと広がっていく過程の追求にあると言ってよいであろう。

Ⅱ．ロバート・ダーントン——ボヘミアン文学者と社会批判文書

まずアメリカのロバート・ダーントンからみていこう。我々が紹介するのは3冊である。第一は『ボヘミアン文学者と革命』という1983年に出版されたもの(6)，第二が『出版と反乱』という1991年1月に出版されたものであり(7)，もう一冊は『文人・本の人』という1992年3月に出たもの(8)である。これらのうち，第二のものはまとまった著作であって，最初からフランス語で書かれたが，第一と第三は論文集で，英語で出版されたもののフランス語訳であり，もとの英語版は右に示したよりも早くに出版されていたはずである。論旨の関係から，第一と第三の書物に掲載された論文のうち，我々の関心に関係するものをまず紹介し，ついで第二の

書物の内容に触れることにしたい。

ダーントンの基本的な関心はフランス革命のイデオロギーの起源を図書ないしは出版の面から探ることにあるのだが，その主張は，一言で要約してしまえば，フランス革命を行なったのは啓蒙思想家に恨みをいだくボヘミアン文学者だった，ということである(9)。すなわち，啓蒙の第一世代をなす大思想家たちはだいたい1780年代前半までにこの世を去るのだが，それと革命までを生き延びた第二世代（彼らがボヘミアン文学者の直接の恨みの対象になる）を分ける大きな違いは，前者は著作を生業とはしていなかったという点である。モンテスキューは裁判官で葡萄園を経営していたし，ヴォルテールは金融投機で富を築いた。エルヴェシウスは徴税請負人であり，ルソーは写譜屋である。ディドロだけが例外的に文筆業だけで生きようとしたのであるが，かなり質素な生活を営まざるを得なかった。それに対して，彼らよりひとまわりかふたまわり年下の世代になると，シュアールにしろモルレにしろ，アカデミー・フランセーズに入り，文筆家として得られる年金で裕福な生活が送れるようになっている。また第一世代の時代には文化のヘゲモニーを握っていたのはカトリック教会であって，啓蒙思想家たちは教会の権威に立ち向かう中から自分たちの思想や著作を生み出していったのであるが，第二世代の時代になると，啓蒙思想家自身が文壇の大御所になっており，彼らの後ろ楯を得なければ若い文学者志望は世に出られなくなっていた。つまり啓蒙思想家が既成制度の中に組み込まれ，その秩序と権威を担う保守化した存在となっていたのである。さて以上のような状況が一方でありながら，他方ではアンシアン＝レジームの末期には教育の普及がみられる。つまりそれまでは子供の教育など関心になかったような庶民階層までが子供をコレージュに入れるようになる。その結果，文学や哲学をかじった若者の数が増え，その何割かは自分自身が文筆家になろうと心に決める。しかもルソーやエルヴェシウスのように生業を持った上で著述を行なうのではなく，文学が自分の天職と思い定め，文筆だけで生活しようとするのである。彼らはモルレのような成功例，つ

まり文筆だけでエスタブリッシュメントの頂点にまで登り詰めた啓蒙思想家の第二世代を仰ぎ見ていた。しかし，文学での成功に憧れる底辺の若者の数はあまりにも多く，それに較べるとアカデミー・フランセーズ会員など頂点の地位はほんのわずかで，しかも既にモルレなどによって占められていて，入り込む余地はほとんどなかった。その結果，文学者志望の若者の多くは，貧困に喘ぎながら，売れそうなものなら何でも書きまくる「ボヘミアン文学者」になるのである。こうした例のいくつかをダーントンは論文に書いている。例えばある自称作家は，一人で農学の概説書とヨーロッパ史の本とドイツ史の本とヴォルテールの作品の抜粋集を作って，そのどれでもいいから出版してくれと本屋にもちかけている。そしてそれが駄目だと「他人の名前で出版しても，一部だけ抜き出して他の本に組み合わせても，何をしてもいいから，とにかく原稿を買い取ってくれ」と泣きついているのである(10)。こうした若い売れない作家たちは，成功した第二世代の啓蒙思想家たちに憧れるとともに恨みを抱いてもいた訳であるが，フランス革命が到来すると彼らは喜々として過激な政治パンフレットの作者になっていく。つまりボヘミアン文学者たちは既成の社会，すなわち自分たちの才能を認めようとせず，自分たちにしかるべき社会的地位を与えようとしなかったエスタブリッシュメントに復讐する絶好の機会を革命のうちに見いだし，アカデミー・フランセーズなど既存の権威の解体を要求し，実現させていくのである。ジロンド派の指導者だったブリソ(11)も，モンターニュ派の中心人物の一人だったマラも，革命前には上に述べた若い作家と似たり寄ったりの生活をしていた。我々がさらにつけ加えれば，革命の初期に大活躍するミラボーも，ロベスピエールの右腕となるサン＝ジュストも，革命の前にはポルノ小説を書いている。ダーントンによれば当時の出版業界者の用語で哲学，フィロゾフィというのは大別して二つの分野の本を含んでいた。一つが，現在の我々がいわゆる啓蒙思想として理解しているものであり，もう一つがポルノ小説である(12)。啓蒙哲学とポルノが同一のジャンルというのは一見奇異に思われるが，どちらも社会や

道徳の秩序に反抗的で，当局から取り締まられるという点では区別はなかったのである。ともあれ，革命を歓迎し，積極的に参加していったのは啓蒙思想家になろうとしてなりきれなかったボヘミアン文学者であった。それに引き換え，第二世代の成功した啓蒙思想家はどうだったかというと，たとえばモルネである(13)。彼はもともとは貧しい庶民の出身であるが，苦学をし，あらゆるコネをつたって出世のチャンスを窺い，1780年代後半には富と名声の両方を手に入れていた。ところが，若いころからの苦労がやっと報われ，自分の立身出世に満足して，これからは悠々自適の老後を送ろうとした，まさにその瞬間に革命が発生して，モルレは自分が数十年かけてやっと手に入れたすべてのもの（巨額の年金とアカデミー・フランセーズ会員の地位）を一挙に失ったのである。当然ながら彼は革命を呪う。このような訳で，1789年まで生きていた啓蒙思想家はむしろ革命に敵対的なのである。「ボヘミアン文学者」という特殊な社会層の出現に注目したところにダーントンの一つの特徴があると思われる。

以上は先にあげた二冊の論文集に拠っているが，『出版と反乱』での論旨はやや異なっている。ダーントンは，18世紀後半に多くのフランス語の書物を出版していたヌーシャテル活版印刷会社の文書を一貫して分析してきており，上に紹介した論文集もその過程から生まれたものなのであるが，『出版と反乱』に至って，ヌーシャテル活版印刷会社の活動全体を総括する作業に踏みだしたようである。この本で問題になっているのは，ボヘミアン文学者という「人」ではなく，「本」そのものである。しかも「啓蒙思想」と「ボヘミアン文学」という区別を取り払っている。ダーントンは，フランス革命のイデオロギー的起源を明らかにするために，「アンシアン＝レジーム末期の人々は何を読んでいたか」と問う。実はこの問いはダニエル・モルネが1910年に発表した論文「個人蔵書（1750－1780）が教えるもの」(14)で発していたものだった。モルネはこの問いに答えるために，個人の蔵書目録を大量に調査して統計をとるという方法に頼った。先駆的かつ意欲的な業績ではあったが，禁書は目録作成の際に意

図的に削除されることが多く，目録からではその人の蔵書の実態は明らかにできない点を見落としていた。さらに，蔵書であっても読まないこともあれば，自分で持っていない書物でも読むこともある。従って，蔵書目録からでは当時の読書の実態はわからないのである。ダーントンは，従って，同じ問いに答えるために「当時の人はどのような蔵書を持っていたか」ではなく「当時の出版社は本屋（および個人）からどのような書物の注文を受けていたか」を問題にする。現在ヌーシャテル市図書館に保存されている，ヌーシャテル活版印刷会社が受け取った5万通にのぼる通信文書がその史料となる。ダーントンによる分析の経過は省略して，結論部分だけ紹介しよう。一例として注文がもっとも多かった書物を上から順に5点あげると，(1)メルシエの『二四四〇年』，(2)ピダンサ・ド・メロベールもしくはテヴノ・ド・モランドの『デュバリ伯爵夫人に関する挿話』，(3)ドルバックの『自然の体系』，(4)メルシエの『パリ通覧』，(5)レイナルの『両インド史』である[15]。(1)と(4)は読み物であるがルソー的な社会批判がちりばめられ，啓蒙思想の通俗化をめざすといってよく，(2)はポルノグラフィ，(3)と(5)は啓蒙思想の書物である。同じく注文の多いものを著者別にみると，(1)ヴォルテール，(2)ドルバック，(3)ピダンサ・ド・メロベール，(4)メルシエ，(5)テヴノ・ド・モランド，(6)ランゲ，(7)デュ・ロラン，(8)レイナル，(9)ジャン＝ジャック・ルソー，(10)エルヴェシウスとなる[16]。すなわち，書物でみても著者でみても，現在まで名をとどめている古典と，今ではすっかり忘れられた通俗作家とが，当時のベストセラーに同居しているのである。ただし，既に記したように，ダーントンは古典と通俗文学を別のジャンルに属するものとして区別するのではなく，両者を「社会批判文書（リベル）」として一つの範疇でくくっている。すなわちポルノグラフィも社会批判のひとつの形式なのである。なぜか。例えばベストセラーの二位に顔を出している『デュバリ伯爵夫人に関する挿話』をとってみよう。言うまでもなく，この伯爵夫人は私生児で娼婦あがりであり，美貌を武器にして国王ルイ15世の愛妾になった女性である。彼女のゴシップを描くこ

とは，第一に，こうしたいかがわしい女性が宮廷の中枢に入り込み，国王をたらし込んで，一種のネポティズムにより政治を私物化しているという現状の告発であり，第二に，娼婦あがりの女性の性的技巧に助けられなければ男性としてふるまえない国王の衰弱を王政そのものの衰退に重ね合わせる効果を生み，さらに第三に，ルイ 15 世とデュバリ夫人の性生活を露骨に描くことはそれだけで国王の権威をおとしめるものだった。つまりポルノグラフィとは，読者の性欲を刺激する書物というよりは，むしろきわめて政治的含意の濃い文書だったのである。逆説的ながら，当時のポルノグラフィは道徳的だった。すなわち宮廷や上層貴族の道徳的腐敗を描きながら，それと平民の質実剛健さを対比させ，政治の腐敗に対する怒りをかきたてる書物だったのである。

社会批判文書の基本的テーマはなにか。ダーントンは，きわめて乱暴な整理だと断りながら，それは二つの D，すなわち「腐敗（デカダンス）」と「専制（デスポティズム）」に帰着すると述べている。モンテスキューが『法の精神』において，従来の民主制・貴族制・君主制に替えて共和制・君主制・専制の三分法を用いたことにより，君主の恣意的な支配を批判するタームとして「専制」が用いられるようになった。デュバリ夫人は，宮廷の道徳的腐敗を体現するとともに，重大な政治的決定が正規の政府機関を経ずに，彼女が寝室で国王を説き伏せることによって行なわれている（と疑われる）ことにより，専制をもたらした元凶ともみなされた。彼女を描くポルノグラフィに限らず，当時の社会批判文書の多くがデカダンスとデスポティズムを表裏一体のものとして政府を攻撃していたのだった。言い換えれば，モンテスキューが行なった理論的考察は，ポルノグラフィなどを通じて人々の間に普及し，通俗化して，人々が政治に対して持つイメージを形成したのだった。その結果，1789 年のバスティーユにはアルコール中毒患者と贋金作りしかおらず，封印状は実質的効果を失っていたにもかかわらず，7 月 14 日のパリの民衆は自分たちのイメージにある「専制」の象徴となっているバスティーユを攻撃し，中にいた「専制の犠

牲者」を解放したのだった。

Ⅲ．ベイカーとシャルチエ――心性の変化

ダーントンは，ヌーシャテル市図書館に保存されている史料に基づき，現在の我々も手にとってみることのできる書物を研究対象に取り上げるという，古典的といってもいいような実証的方法をとった。それに対して，いわば歴史の「深層」とでも言うべき心性，ないしは政治に対する人々の態度の変化を問題にしたのが，ベイカーとシャルチエである。まず同じアメリカ人のキース＝マイケル・ベイカーの研究を紹介しよう。我々が読んだのは『世論の審判へ』という論文集で，これには『18世紀の政治的想像力についての試論』という副題がついている(17)。1993年の春に出たものであるが，もとの英語版は1990年に出版されている。この本でベイカーの問題設定はダーントンとは異なり，革命のような過激な変革がいかにしてパンサブルになったのかを問うている。パンサブルとは直訳すれば「考えうる」ということであるが，これには「思いつく」，つまり革命なら革命というものがあると考える，革命というものに思いが到るという意味と，その革命が荒唐無稽なものでも実現不可能なものでもなしに，自分たちがやろうと思えばやれる，十分に起こりうることとして意識されるという意味，さらに革命がそれなりに道理に適ったものであって正当化しうるという意識を持ったという意味などを含み込んでいるように思われる。モルネ的な発想からすれば，革命は啓蒙思想の普及によってパンサブルになった訳であるが，ベイカーはそうは考えない。彼は「啓蒙から革命へ」という流れではなしに，啓蒙と革命の双方を同時にパンサブルなものにした背景として世論の成立を指摘する(18)。すなわち，絶対王政の統治の原則は「秘密」，日本流に言えば「依らしむべし，知らしむべからず」ということだった。国王の権力は一般の人には窺い知ることのできない神秘的なものであるが故に尊かったのである。ベイカーによればボシュエの王権神

授説は，王の権威の根拠を説明するというよりは，王の権威はさらに上の神から出ているのだから下々の者があれこれ取り沙汰するべきものではないとする，つまり王の権威に神秘のベールをかけるところに意義があった。ところが18世紀半ばからフランスの政治文化に変化が生じる。人々は，といっても一般庶民ではなくて主に高等法院であるが，国王にたいして自分たちの意見を表明するようになり，国王に個々の政策の根拠を説明するよう求めるようになった。それに対して王権を支持する側も積極的に論争に応じ，議論と説得を通じて，人々の支持を得ることに努めるようになる。「秘密」から「説得」へと180度方向転換したわけである。そのきっかけになったのはジャンセニズムをめぐる論争だった。国王はジャンセニストが宗教祭儀をとりおこなうことを禁止したのであるが，そうなるとジャンセニストの司祭がいる教区の民衆は死ぬときにも罪の赦しを得られず，永遠に地獄におちることになる。いくら国王の権威とはいえ，魂の救いまで禁じられてはたまらない。高等法院がこの不満を代弁した結果，かなりの国民の支持を集める。そもそも高等法院はルイ14世のもとで次々と権限を縮小され，無力化されていたのだが，ジャンセニズムをめぐる政治的混乱の中で勢力を回復する。そしてそれ以降，いわば国王の専制から国民の権利を守る砦として，事あるたびに国王と対立するようになるのである。もちろん高等法院だけではない。ベイカーは18世紀後半の政治の特徴を，統治者である国王に対する批判や抗議が日常化した点に求めている。そうなると国王の側も黙ってばかりはいられない。ボシュエが説いたような神秘的な王権をふりかざし，「これが国王の意志である」と言えば国民が黙って服従する時代は過ぎ去ったのである。従って王権側（ベイカーはその代表としてジャコブ＝ニコラ・モロを挙げ，彼の政治思想の分析に一章を割いている[19]）もフランス史の実証的な分析を通じて国王の支配権が正当なものであることを論証するようになった。モロ自身はそうした論証によって国王の権威が強化されると信じていたのであるが，結果は逆だった。別に，モロの論証の仕方が悪かったためではない。そもそも正当性を論証

しようとすること自体が誤りだったのである。つまり，我々なりの比喩で言えば，ルイ14世の頃の国王は競技場のどこか，観客の目に触れない役員室にいて，必要な時に最終的な判断を下す審判委員長だった。彼の判定には選手も観客も無条件で服さねばならなかった。しかしモロは国王を，競技場の中で人々の視線に身をさらしながら，絶えず自分の強さをアピールしなければならない選手の一人にしてしまったのである。仮に彼が無敵の強さを誇ったとしても，やはり審判の判定には服さねばならない。その審判とは，もはや国王自身ではなく，世論になったのである。これを国民の側から言えば，自分たちも国王と同じ資格を持った選手なのだから，王権の支配的イデオロギーとは別に，政治・経済・宗教・社会に関して自分たちなりの思想を形成することも許されている，ということになる。これが啓蒙思想の生まれる基盤となる。同様にして，国王とは別の，さらには国王のいない政治制度を構想し，実現しようとすることも，原理的にはなんの不都合もないことになる。すなわちフランス革命はパンサブルになった訳である。

そうするとベイカーのいう世論とは何かが問題となろう。これについて彼は，「世論とは社会学的な現象ではなくて，政治的な発明である(20)」と述べている。つまり世論調査などをした結果として，国民の過半数が望んでいるのはこれこれの政策である，と示されるものではない。第一，そのような世論調査は18世紀末のフランスには存在しない。そうではなくて，当時の政治論，政治的パンフレットが世論として語るものが重要なのだと言うのである。これはベイカーだけに限らず，今回とりあげる3人を含めていわゆる政治文化を問題にする研究者全員に共通することであるが，彼らは社会現象をそれ自体で客観的に実在する実体とは考えずに，人々のディスクール，発話行為によって構成される客体と捉える。ベイカーが世論を考える際も同様で，彼は当時の世論の実態がどうだったかは最初から問題にしていない。そうではなくて「世論」という語ないし概念が，当時の政治的議論の中で，どのように機能していたかを問うのである。論

文集であるから，似たような議論が何ケ所かにあるのだが，一例を挙げると，ベイカーはディドロの百科全書における「意見（opinion)」とパンクークの方法的百科全書における「世論（opinion publique)」の違いを指摘している[21]。つまり1750年代の百科全書では，意見とは不確実な憶測であって，確実な知識である科学と対照をなすものであり，科学の進歩にともなって次第に消滅すべきものとされていた。それに対し1780年代後半の方法的百科全書になると，意見という項目はなくなるかわりに「世論」が政治の巻に登場し，世論こそが普遍的・客観的・合理的な政治的意見なのであって，個々の論者の見解はこの世論に照らしてその当否を判定されるべきものであるとされているのである。政治文化をやる人たちのもうひとつの特徴として，これはミシェル・フーコーの影響だと思われるが，因果関係は問題にしない点があげられる[22]。つまり国王の精神的な権威が衰えたから，それに替わって世論が審判者の位置をしめるようになったとも言えるし，逆に世論が重視されるようになったから国王の地位が低下したとも言えるのだが，ベイカーにとってはどちらが原因でどちらが結果かという因果論は問題ではない。単に，ジャンセニズムをめぐる論争がきっかけとなってこうした変化が兆し，1770年代には完全に国王と世論の位置が入れ代わっていたという事実を指摘するだけなのである。

ベイカーは論文集の中で，絶対王政を支持するモロや逆に批判するマブリなどがどのように自分の議論を展開したか，その際に世論への配慮がいかに無視しえないものになっていたか，というケーススタディをいくつかやっている[23]のだが，これについては省略する。ただ一つ，1770年代前半にモープーが高等法院の改革を試みた際に展開された様々な議論の中に，共和政体論も含めて後の革命期に登場する政治論のすべてが登場する，言い換えればルイ16世が即位した時には革命は完全にパンサブルになっていたという指摘[24]を紹介しておきたい。もう一度繰り返すが，ベイカーにとっては啓蒙と革命の関係が問題なのではなく，啓蒙と革命の双方を成立させた共通のきっかけとして世論の成立を考えているのある。

三番目のロジェ・シャルチエの議論を紹介しよう。ここで取り上げるのは1990年に出版された『フランス革命の文化的起源』(25)である。これは論文集ではなく，まとまった著作だが，エセーであって実証的研究ではない。つまり史料をもとに新たな事実を指摘してみせるのでなく，これまでの研究を整理しながら自分なりの展望を描いてみせた著作である。タイトルからも察しがつくように，シャルチエはモルネの『フランス革命の知的起源』を念頭において，これを批判することを目的としている。ただ，個々の事実に関しては，世論を取り上げる時にはベイカーにかなり依拠しており，宗教的心性を論じる時には主としてミッシェル・ヴォヴェル(26)に依拠し，書物について議論する際にはダーントンを引いてくるというように，章ごとに典拠がことなるので，やや議論が一貫しないうらみがある。それでは，彼の本の存在意義はどこにあるかといえば，議論の対象をかなり拡大し，庶民層までを含むフランス人の心性を取り上げてみせた点だろうと思われる。

例えば，ダーントンがボヘミアン文学者の出現に注目したことは既に指摘したが，シャルチエもこの議論を引き継いでいる。しかし彼は，類似の状況は弁護士についてもあてはまると指摘するのである。つまり当時は大学の法学部を卒業しさえすれば誰でも弁護士として登録できたので，大学卒業者がふえるに従って弁護士の数も増加していく。しかし訴訟の数がそれに比例してふえるわけではないから，殆どないしは全然客の来ない弁護士，言い換えれば弁護士と自称しているだけの失業者が増加していく訳である。つまりダーントンはボヘミアン文学者という社会の一分野における特殊な階層だけを扱った訳であるが，シャルチエはそれを敷衍して社会全体の閉塞的状況（教育水準の向上によって出現した高学歴層の数と，その学歴にふさわしい職業・地位の数の間に不均衡が生じ，人々が自分の上昇指向を満たせない状況）として捉えなおすのである(27)。

ベイカーが扱った世論はシャルチエも重視している。国王に替わって世論が判断の基準となった時にフランス革命がパンサブルになったと見る点

で，両者は一致している。またそのきっかけとしてジャンセニズム論争に注目する点でも同様である。しかしベイカーの議論はあくまでも政治的論争に限定されていた。つまりジャンセニズムに関連して，国王の命令が国王の命令であるというただそれだけの理由で受け入れられる訳では必ずしもなくなったという点を，ベイカーは強調したのである。それに対してシャルチエは，ベイカーの主張はもちろん認めるが，さらにジャンセニズム論争が人々の宗教的心性に及ぼした影響にも言及している。つまり彼によれば，一般庶民にとっては教会の教えは絶対的で無条件に信じるべきものだったのに，その教会の偉い人たちが自分たちにはおよそ訳の分からない問題をめぐって大喧嘩し，非難しあい，向こうの言うことを聞くと地獄に落ちるなどと互いに言っている。つまり一般庶民はジャンセニズムをめぐる神学的な議論は全く理解できなかったが，教会の教えが絶対に正しいものではなさそうだと感じ取り，宗教全体に対して，俗な言い方をするならば，しらけてしまった訳である。18 世紀を通じて進展する非キリスト教化の動きは，こうして聖職者自身が生み出したのであって，ヴォルテールなど啓蒙思想家たちのカトリック教会に対する攻撃によって生じたのではないのである。

さらに国王の権威の低下を見る場合も同様で，ベイカーが取り上げるのはあくまでも王の政治上の権威ないし強制力であるが，シャルチエは文化的権威をも視野に入れる。彼によれば，伝統的な宮廷社会においては芸術における美も宮廷が決めていた。つまりどのような芸術作品を宮廷が受入れ，どの芸術家に援助を与えるか，それが人々が美を判定する基準になっていた訳である。ところが，1737 年からサロン，つまり官立美術展がパリで定期的に開かれるようになった。多くの人が美術展に訪れ，自分の目で芸術を鑑賞するようになる。しかもじきに美術批評が行なわれるようになる。啓蒙思想家のディドロもサロンに出品された作品の批評を執筆しているが，ともかく宮廷とは無縁の人間が芸術の美的価値を論じ，それが人々の判断に影響を及ぼすようになる訳で，宮廷の権威独占が破られ，その

地位が相対的に低下することになる。

ベイカーの場合，先に見たように，政治的ディスクールを発する主体のみに視野を限定しているため，そもそも世論とは何かは議論の対象とはならなかった。しかしシャルチエはディスクールを受け取る一般庶民の心性を主に考察しているので，世論そのものの社会学には踏み込まないものの，誰が世論をになう，もしくは表明するのかという問題が提示されることになる。当時の通念においては，国民全体が世論をになうのではない。教養ある啓発された人々である。ヴォルテールもマルゼルブもコンドルセも，いわゆるエリート層と下層民とを区別して，前者にのみ意見を表明して人々を導く役割を認める点で，共通していた。その際，彼らの理念においては，下層民は無視されてはいない。事実上は無視されていると言ってかまわないと思われるが，理念的には，下層民は自分の意見を表明する能力を持たないので，彼らの意見は代表者であるエリートによって代弁されることになる。言い換えれば，エリート層は自分たちだけの階層的利害を表明するのではなく，国民全体の意見を代弁しているのであり，また国民全体の意見の表明である限りにおいて，彼らの発言はまさに世論としての重みを持つことになるのである。すなわちエリート層は下層民とは別の一階層なのではなしに，下層民も含み込んだ国民全体の代表と意識されている訳で，代表制という概念は政治制度として考えられる前に，まず文化的なものとしてイメージされたのだ，とシャルチエは述べている。

世論を単に政治の分野に限定せず，広く文化ないし社会の全体につながるものとして捉えるところにシャルチエの特徴がある訳だが，出版統制の問題にも言及している。書物の歴史がシャルチエ本来の専門分野であるから，当然と言えば当然なのだが，彼は一八世紀後半になぜ国王による検閲が社会問題もしくはスキャンダルとして意識されるようになったのかを問うている。まず，なぜそれまでは国王政府による出版統制が受け入れられていたかと言えば，今述べたように，宮廷社会においては国王が美・真理・道徳の基準であり，裁定者であったからだった。個々の出版物が道に外

れ，世を惑わすことがないかどうか，国王が判断を下すのは当然だったのである。ところがそうした国王の権威に疑問がよせられる。国王よりも世論の方が重視されるようになる。そうすると国王が検閲などするのは専横であって，なんでも自由に出版させ，世論の判断に委ねるべきではないかという意見が出てくる。それをはっきりと述べたのが政府の出版局長の地位にいたマルゼルブである。彼がいわゆる啓蒙思想関係の書物の出版に好意的だったことはよく知られているが，彼は決してすべての書物が出版に値すると思っていた訳ではない。ただ，ある本が読むに値するかどうかを判断する主体は世論，つまり人々であって国王ではないと考えていたのである。こうした考えは，出版統制のやり方それ自体によっても強化される。言うまでもなく検閲によって出版許可が与えられるものと禁止されるものがある訳だが，思想関係の書物が増えると，両者の中間が増えてくる。つまり無条件で許可するわけにもいかないが，わざわざ禁止するほどでもない，もしくは下手に禁止してその本が話題になったらかえって藪蛇になる，といったたぐいのものである。それに対処するために，政府は黙許という手段をあみだした。つまり正規の許可は与えないけれども出版は黙認するというものである。これは言い換えれば，法を適用する立場にある政府がみずから，法の網をかいくぐることを人々に認めた訳であって，結局は法律とそれを司る国王の権威に疵をつけ，検閲制度の矛盾を人々の目にさらすことになったのだった。

このようにシャルチエは，ダーントンが指摘したボヘミアン文学者の出現という文筆業者の世界での変化や，ベイカーが指摘した世論の成立という政治文化ないし政治制度の分野での変化を取り上げ，それを社会全体に敷衍して捉えなおしてみせることによって，18 世紀後半における人々の心性の変化を描いてみせた訳である。さて，シャルチエは本のタイトルからしてモルネを明確に意識しているのだが，具体的にはモルネをどう批判するのであろうか。彼は今述べてきたような心性の変化がフランス革命をパンサブルなものにしたとする，その点でベイカーの主張に非常に近いの

だが，ベイカーが世論の成立が啓蒙思想と革命の双方の背景であると考えるのに対して，シャルチエはそもそも啓蒙思想など存在しないのだという，非常に大胆な説を提示している。彼自身の言葉を引用すると，第一章の初めの方で，「啓蒙思想がフランス革命を作りだしたという古典的な解釈は，ものごとの順序を逆にしているのではないだろうか。むしろフランス革命が啓蒙思想を発明して，もとになる理論を作った著者やテクストのうちに自分自身の適法性を基礎づけようとし，そのためにそれら（のテクスト）相互の明らかな違いは中和され，旧世界との決別を準備したという一点で結び合わされたのだと考えるべきではないのだろうか。(28)」と書いている。つまり当時の用語でフィロゾフィというのはポルノ小説まで含んでいた訳で（これは先に述べたダーントンに依拠している），革新的な政治・社会思想のみを指すわけではなく，また社会論・政治論に話を限っても，相互に相矛盾するような様々な思想が当時表明されていたのであって，まとまった思想グループが形成されていたわけではない。さらにそもそも書物の読者層は非常に限られていて，人々の大部分にとっては思想など無縁のものだった。だから思想が革命のうねりをもたらすような動きを作りだしてなどいなかったと言うのである。この点で，シャルチエはダーントンと完全に異なっている訳で，ダーントンはボヘミアン文学者がつくる社会批判文書が世論に及ぼした影響を重視するのだが，シャルチエは庶民の心性が変化したのは，政治・経済・社会・文化など，様々な要因がからみあっているのであって，印刷物から影響を受けた訳ではないと考えているのである。そしてフランス革命が始まってから，革命家たちが自分の主義主張を正当化するためにモンテスキューの『法の精神』とかルソーの『社会契約論』とかいった自分たちに都合のいい書物だけを抜き出して取り上げ，あたかも「啓蒙思想」という一貫した思想運動が実際にあって，その思想を実践に移すと必然的に自分たちがやっている革命になるかのように装ったのだという訳である。従って啓蒙と革命の間に因果関係を認めるモルネに代表されるような解釈は，フランス革命の際にイデオローグが作りだし

た神話にいまだに騙されているのだ，というのがシャルチエの主張である。

Ⅳ.「啓蒙思想」概念の再検討

以上に紹介してきた三人は，それぞれに啓蒙思想とフランス革命の関係を問題にしているのだが，それではそもそも「啓蒙思想」とは何かという点になると，誰も明確な定義は下していない。しかしこの点こそが，実は隠れた中心問題なのである。モルネのように，現在まで名を残している大思想家たちの古典的著作にのみ囚われずに，「啓蒙思想」概念を再検討・再定義することが（啓蒙思想などなかったと言うシャルチエも含めて）三人の基本的関心なのだと思われる。

まずダーントンから見ていこう。すでに述べたように，『ボヘミアン文学者と革命』においては，一方に「啓蒙思想家」と彼らが書く「哲学書」を置き，他方に「ボヘミアン文学者」と彼らの「社会批判書」ないしポルノグラフィを置いて，両者を二元的に捉えていた。前者は「高級な啓蒙」で，後者は「低俗な文学」だった。作者の側でみると，前者の担い手は第二世代に至って保守化したが，後者は革命に積極的に参加していった。また読者の側でみると，前者はエリート層に読まれて，彼らの権力に対する猜疑心を強化し，後者は民衆層の不満を代弁するものだった。つまり，両者は作者側だけでなく，読者の層においても対照的だったのである(29)。しかし『出版と反乱』においては，こうした二分法は姿を消している。一つには史料の問題があろう。ヌーシャテル活版印刷会社に宛てられた発注書は書店からのものであって，その分析からは，最終的に誰がその書物を購入したかは明らかにはならない。すなわち「高級な啓蒙」はエリート層のもので，「低俗な文学」は民衆層という仮説は，史料的に実証しえないのである。しかし，問題はそうした表面的なところにあるのではないだろう。そもそも「高級な啓蒙」だけが啓蒙思想なのかという点が問題なのである。それは単に，現在の我々にまで古典として引き継がれてきた書物を，

当時のフランス人も我々と同じ感覚で読んだはずであるという，我々の側の勝手な思い込みによるだけではないのだろうか。もしそうした先入観を取り払って，当時の人々の読書の実態を探ってみるなら，「啓蒙」と呼ばれる思想運動のあり方が，より現実に即して現れてくるのではないだろうか。ダーントンは発した問いはそのようなものだったはずである。それで『出版と反乱』においては，モンテスキューの『法の精神』と宮廷人の性生活を取り上げてポルノグラフィとを，ともに「社会批判文書」として，同じ平面に並べてみせているのである。

シャルチエの問題関心も，基本的にはそれに等しい。「フランス革命が啓蒙思想を作りだした」というキャッチフレーズはいささかセンセーショナルで，逆説を弄んでいるという印象を拭えないが，本文中で彼が述べていることはずっと穏当である(30)。すなわち，ルソー，マブリ，エルヴェシウス，ヴォルテール，レイナルなどの名が意識的に挙げられて，彼らの著作が革命に直接つながっているかのような言説が現れるのはフランス革命期である。しかし革命前には，彼らが特に読まれていた訳でもなく，彼らだけが読まれていた訳でもなかった。ポルノグラフィなども含めて，もっとずっと広範で雑多な著作が併存していたのだ，というのがシャルチエの主張なのである。これは，ダーントンの言葉で言いなおせば，革命前には思想書も時論書もポルノグラフィも読まれていたのに，革命期になって，そうした書物のカオスの中から「高級な啓蒙」という上澄みがすくい上げられ，それだけが「啓蒙思想」であるかのような言説が行われるようになった，ということである。何冊かの思想書に体現されている「高級な啓蒙」よりもむしろ書物のカオスの中に，シャルチエは啓蒙運動の実態を探ろうとしているのである。

その限りにおいて，ダーントンとシャルチエは共通の関心に導かれている。両者が分かれるのは，ここから先である。ダーントンは革命前にどのような書物がよく売れていたかを確認した後，それらの書物のテクストを分析する。そして，それらが当時の政治制度の腐敗と専制化を批判する点

で共通していることを確認する。腐敗と専制化に対する批判が書物によってもたらされたが故に，当時の人々は政治が実際に腐敗し，専制化していると考えた。それが革命につながっていったとダーントンは捉えるのである。この点を取り上げて，シャルチエはダーントンに批判を浴びせる。書物に書いてあることを読者が字句どおりに受け取って，自分自身の意見にすると想定するのは，言うなれば短絡である。著者が書いたテクストと読者の読解との関係は，そのような直線的で単純なものではないと，シャルチエは言うのである(31)。彼の批判は，いわば二段構えになっていて，まず第一に，ダーントンは書物が当時の人々に与えた影響を過大評価しているのであって，書物は影響力を持たなかったとし，第二に，仮に影響力を持ったとしても，その影響はダーントンが考えるような直線的なものではなかった，としている。なぜなら，当時の人々の読書範囲は狭かったし，また読書をしても関心は長続きせず，二週間もたてば内容を忘れてしまっている。さらに書かれている内容を全て信用しながら読んでいる訳でもないからである。また，同じ本を読んでいながら，革命になるとある者は参加し，ある者は反革命にまわるというように，異なる態度をとることもある。この点に関連して，シャルチエはアプロプリアシオンという概念を用いている(32)。直訳すれば「我が物にすること」であるが，読者は，著者の意図とは無関係に，自分自身の世界観や関心を書物に投影して，自分なりの読解を行なうのだということ，言い換えればテクストの意味とは，著者によって予め付与されているものを受動的に受け取るというよりも，読者が自分で作りだすものなのであって，そうした創造的な読解をシャルチエはアプロプリアシオンと呼ぶのである。もし書物がフランス革命に与えた影響を問うのなら，ダーントンのようにテクストを問題にするのではなく，むしろ読者のアプロプリアシオンのあり方を問わねばならないと，シャルチエは考えている。

ただし，シャルチエ自身は，少なくとも我々が本稿で紹介した書物においては，アプロプリアシオンのあり方を正面から論じてはいない。書物が

及ぼした影響を否定する以上，それは当然であろう。彼は，もし書物になにかフランス革命につながるものがあるとすれば，それは読書の態度の変化であろうとする。すなわち，いわゆる読書革命であるが，人々はこれまでのように少数の書物を繰り返し精読するのではなしに，多くの書物を乱読するようになった。しかも，書かれた内容に対して批判的な態度で読むようになった。権威に盲従するのではなしに，自らが批判的に考えること，これは単に読書のみに限られず，ベイカーが取り上げた世論の成立にもつながっているのであるが，シャルチエはそうした読書のあり方の変化を指摘するにとどまっているのである。

「啓蒙」概念の再検討という点に関しては，ベイカーは問題意識が希薄である。彼の場合，すでに述べたように，「啓蒙から革命へ」という流れではなしに，啓蒙と革命の双方をパンサブルにした要件を問い，それを世論に求めた点が斬新なのであるが，ではその場合の啓蒙とは何をさしているのか，特に明確にしていない。彼が問題にするのは，あくまでも政治思想ないしは政治意識であり，国王の権威から独立して政治のあり方を構想するのを啓蒙と捉えているように受け取れる表現がある。そこからすれば，ベイカーが考えている啓蒙とは，ダーントンのいう「高級な啓蒙」の政治思想ということになろう。ただベイカーが取り上げるのはモロ，マブリ，セージュなど，従来の思想史研究からみれば二流の思想家たちである。世論の成立との関連から見れば，これまで二流と見做されてきた思想家たちの方がむしろ時代の精神を反映していると積極的に評価するためなのか，そのような意思はないのかが不明なので，ベイカーが考える啓蒙とは何なのか，はっきりと焦点が結ばれていない印象をぬぐえない。

V．結論に替えて

ベイカーの研究は，「啓蒙から革命へ」というモルネ以来の図式を書き換えた点で興味深いのだが，彼の議論は理論と実証がいささか分離してい

る。すなわち，18 世紀初頭には絶対王政の支配原理が残っていたが，ジャンセニズムをめぐる論争をきっかけとして変化が生じ，1775 年にルイ 16 世が即位した時には世論が成立しており，フランス革命の際にみられる政治論もすでに出揃っていた，という理論的図式は，やや独断的に実証を抜きにして語られ，モロやマブリに関する実証的なケーススタディは，従来の古典的な思想史研究の方法で行われており，両者の間に落差が感じられるのである(33)。これは，彼の研究の方法，というよりは方法の不在に由来するのであろう。すなわち，彼が取り上げようとしているのは，人々の政治的心性ないし政治に関する態度の変化である。これ自体は，いわば歴史の「深層」であって，現象として現れてはこない。そうした深層での変化の現れとして世論が取り上げられる。しかしそれも，世論自体を社会学的に扱うのではなく，当時の思想家ないしは彼らの著作の中で，「世論」がどのようなディスクールで現れているかを論じるのである。つまり，二重に迂回しながら，直接には触れ得ない心性に迫ろうとしているのであるが，あいにく史料から直接明らかにできる歴史の表層と，その下に隠れた深層をとをつなぐ回路，両者を結ぶべき方法が見つかっていない。そのため両者が有機的に統合されていないのである。

シャルチエは，基本的にはベイカーの理論的図式に乗っている。すなわち，シャルチエも，啓蒙と革命の双方をパンサブルにした背景として，人々の心性の変化を問題にし，世論の成立にその変化の現れを見ているのである。しかし彼は，ベイカーとは異なって，エリート層に属する著作家のディスクールにではなく，民衆の態度そのもののうちに心性を探ろうとしている。宗教と聖性，国王の権威とイメージ，社会的移動性の増加，フォークロアと政治の関係の変容，農村における農民騒乱や都市での親方と徒弟の関係の変化などである。その結果，すでに記したように，依拠する研究が替わるたびに論述が変化し，全体を通した一貫性に欠けるという欠陥をはらみながらも，民衆の心性を不完全とはいえ浮かび上がらせているのである。ただ，啓蒙思想とフランス革命の関係を探ろうという我々自身の

関心からすると，対象が広がりすぎたために焦点がぼやけてしまったという印象を否めない。彼は，ベイカーに倣って世論と言ったり，カントの『啓蒙とは何か』を引いて「理性の公的使用」と言ったりしているのだが，それは出版物にも現れれば，読書の態度にも，美術の鑑賞にも，死に臨む態度や避妊にも現れ，そしてもちろん，政府や領主を批判する際にも現れる。つまり，18世紀後半の社会生活のほぼすべての面に「啓蒙」は現れているのであって，これでは啓蒙運動を特に取り出して問題にすることができなくなってしまう。書物に関連してダーントンを取り上げ，彼を批判する際の論述のみが，我々の関心に応えるものとなっているのである。

ダーントンは，直接に触れることができない歴史の深層はあえて問題にせず，ヌーシャテル市図書館で手にすることができる古文書からわかることのみを明らかにしようとしている。古典的な実証主義ともいえる手法であるが，堅実であり，我々はもっとも共感をおぼえる。また，彼が，当初は「高級な啓蒙」を啓蒙思想として，そこからはずれらボヘミアン文学者の方にフランス革命のイデオロギー的起源をみようとしていたのだが，近著においては両者を区別せず，双方が渾然一体となってひとつの思想運動ないしは傾向をかたち作っていたとみていること，言い換えれば，ポルノグラフィ・社会批判文書をも含みこむように「啓蒙思想」概念を拡張しようとしていることも，充分に首肯できるものであろう。ただし，彼の方法にも限界はある。「どのような書物が売れていたか」を明らかにするだけでは，「誰が，どの書物を，どのように読んだのか」はわからないのである。ダーントンは，モルネが行なった蔵書目録の調査の限界を指摘し，その限界を乗り越えるためにヌーシャテル活版印刷会社が残した文書を調査したのだった。しかし今度は，彼のモルネ批判が，いわば裏返しになった形で，ダーントン自身にはね返ってくるのである。「誰が」についてはすでに触れた。書店からの注文書だけでは，最終的に誰が購入したのかはわからない。それ故にダーントン自身が，「『高級な啓蒙』＝エリート層，『低俗な文学』＝民衆層」という仮説に触れなくなったのである。「どの書

物を」については，ダーントンの調査で，確かにある程度は明らかになった。当時のベストセラーが明確にされたからである。しかし疑問は二点残る。第一に，人々は新刊書だけしか読まなかったのだろうか。精読から乱読へという読書革命は，確かにこの時代に関して指摘されてはいるのだが，親から伝えられた書物を全く読まなくなったとは想定できないであろう。第二に，ヌーシャテル活版印刷会社に注文があった書物だけが，本当に売れていたのだろうか。実は，これは答えようのない疑問である。なぜなら，まとまった史料が残っているのはヌーシャテル活版印刷会社しかなく，従って比較の仕様がないからだ。しかし，ダーントン自身がパリの出版社とフランス国内の地方の出版社，フランス国外の出版社では，多少傾向に違いがあったことを指摘している(34)。そうだとすれば，もしパリ市内の出版社の受注書が見つかったなら，ヌーシャテルとは異なる傾向があったとわかるかもしれないのである。もちろん，実際には史料がないのだから，こんな想像を弄ぶことに意味はない。また，たまたま史料の残っていたのがヌーシャテルだったことには，それなりに積極的な意味があった。すなわち，フランス国内で印刷出版が禁じられた書物でも，スイスでなら自由に印刷できるから（もちろん，それをフランスに搬入するのはまた別の問題である），受注する書物はそうした地下出版物が相対的に多くなる。まさにこうした禁書こそ，モルネが調査した蔵書目録からは欠落している部分であった。つまり，モルネの史料の偏りを補うためのカウンターバランスとして，ダーントンの研究は重要なのである。しかし，彼が指摘したベストセラーだけが読まれていたのだと想定してしまうと，モルネとは逆の偏りが生じるのではないだろうか。最後に，「いかに読んだか」である。これこそ，まさにシャルチエが批判した点であり，その批判は充分は説得力を持っている。ダーントンの方法は「いかに読んだか」という問いに対して無力なのであるが，そのことを指摘したシャルチエも，同じ問いに答える方法を示している訳ではない。

ベイカーとシャルチエが問題にしたのは，18 世紀のフランス人の心性

であった。興味深く，刺激的なテーマではあるが，これを研究しようとすると，ある地点から先は共感的に理解するほか，如何ともしがたいことになる。ところが文化的背景が全く異なる我々にとっては，いかに共感しうるのかが，解きがたい難題となる。その点だけからしても，我々にはダーントンの実証的な方法がもっとも評価できるのである。彼の研究を充分に評価し，摂取した上で，その限界を乗り越えるにはいかにしたらよいだろうか。今，この問いに全面的に答える用意はない。ただ，「誰が，どの書物を，いかに読んだか」という問いに百パーセント答えられる史料は今のところないのであるから，とりあえずは個別事例の研究を積み重ねる（これはベイカーの方法だが）以外にないのではないかと思われる。

そこで最後に，アベ・マジという，たぶんトゥルーズの地方史の好事家でもなければ知らない人物ではあるが，比較的興味深い生き方をした男のことに触れておきたい(35)。彼，ジャン＝ピエール・マジは1721年3月15日(36)，ジャック・マジとジャンヌ・ジョワイユの子として，オリアックに生まれた。おじのピエール・マジは司祭であり，母方のおじジャン＝フランソワ・ジョワイユは1736－40年トゥルーズのイエズス会コレージュの教授を勤めていた。ジャン＝ピエールは，このイエズス会士のおじに預けられてトゥルーズで学び，1747年3月6日に神学のリサンスを得ている。おじの計らいでマルヴァイユの教区を入手し，アベをなのるようになった。時間が前後するが，1742年頃に恋愛を体験し，相手に詩を贈っている。またこの年，聖職者による金銭の巻き上げや蓄財をテーマにした『サント＝マグリット島からの1742年5月22日の書簡』を執筆しており，1744年には，聖職志望者の淡い恋を扱った詩『ドロテのラクロスティシュ』を執筆した。1750－55年頃には，小説『ある男と女の文通書簡』，短編小説『隠れた愛』，同じく短編小説『浮薄の危険』など，男女関係を扱った作品執筆しており，当人も失恋を経験して，精神上の危機にあった。その後，1755－60年頃には，信仰の危機におそわれる。60年代半ば，聖職を最終的に放棄し，おじとの関係は疎遠になった。1764年

には『哲学辞典への反論の試論』で信仰を擁護してはいるが，同時にヴォルテールの作品に通じており，ヴォルテール的イロニーを身につけていることも示した。これ以後は純文学の作品からは手を引き，歴史・考古学の実証研究の道を歩むことになる。1768 年には『怪獣民族についての論考』を執筆した（出版は 1782 年)。これは未開地への旅行記に怪獣と報告されているものを，例えば半人半獣と記されているのは動物の皮をまとった未開人を見誤ったものであろうとするように，合理的に説明しようとしたものである。1774 年には，トゥルーズの文芸団体であるアカデミー・デ・ジュ・フロローの 16 世紀の議事録をパリで見つけ，それをもとにジュ・フロローの歴史を実証的に研究した。翌年にはこのアカデミーの会員に選出されており，82 年にはトゥルーズの科学アカデミーにも参加している。ジュ・フロローには，14 世紀後半もしくは 15 世紀初頭にクレマンス・イゾールという女性が存在したと伝えられており，彼女が衰えかけていたジュ・フロローを再興したとされていた。マジは，ジュ・フロローの歴史について事実と伝説を峻別することに努めており，クレマンス・イゾールについても，その実在をアプリオリに認めようとする他の会員とは距離をおいている。また古代ローマの影響がどの程度トゥルーズに及んだのかについても実証的に考察した。フランス革命が始まった頃にはトゥルーズの北西にある小さな町グルナドに引退していたが，1789 年 11 月 29 日，町当局が国民議会に対して地区議会の開設を要求した際には，文面の執筆に加わっている。1791 年 5 月 12 日，および同年 12 月 29 日に執筆した覚書では特権層を批判した。翌年の 10 月 7 日に行われた町の執行部選挙では副議長に選出され，同月 10 日，シヴィズムの宣誓を行った。93 年 1 月 24 日の改選でも市役員の一人に選ばれている。同年 12 月 5 日，72 才で結婚した。妻テレーズは 27 才である。94 年 2 月 1 日，町の治安判事に選出された。この年の 8 月 23 日には最高存在の祭典で演説している。同年 11 月 25 日，長男エミールが誕生した。95 年，治安判事に再選されたが，この頃に公職を引退した。1801 年 9 月 4 日[37]に死亡してい

る。

我々は，先に述べたように，いくつかのケーススタディを行なおうと考えており，このアベ・マジだけに特別の関心を持っている訳ではない。それでも彼の生涯は，三つの点で大変興味深いと思われる。第一に，彼の人生そのものである。最初はカトリックの聖職者をめざしながら，ちょうど啓蒙思想が盛んになる時代に哲学に関心を抱いて聖職者を断念する。そしてフランス革命が始まるとそれに参加し，老年に至りながら独身生活をやめて，赤い聖職者のように結婚までするのである。かなり時代の精神を体現しているようなところがある。第二に，彼の著作は印刷されたものも多いが，そうでないものも含めて，かなりの草稿がトゥルーズの科学アカデミーに残っている。全部で777枚のマニュスクリプトである(38)。その上彼は自分自身で蔵書目録を作っており，こちらはトゥルーズ大学の図書館に保存されている(39)。両方をあわせると，彼がどのような本を読み，どのようなことを考えていたか，かなり再現できるのである。もちろん，我々は無批判にモルネの蔵書目録研究の段階にもどるつもりはない。ダーントンのモルネ批判を弁えた上で，蔵書目録もひとつの参考資料として活用しようと思うのである。第三に，ダーントンのいうボヘミアン文学者とのからみである。確かにアベ・マジは中央で華々しく成功したわけではないが，トゥルーズという地方都市レヴェルではそれなりの名士で，知的活動の面では町のリーダーの一人であり，決して世に入れられないのをすねていたりしたのではない。それでもフランス革命には参加している。これはダーントンの図式ではどう位置づけられるのであろうか。二通りの回答が予想できる。第一は，地方都市では事情は異なるというものである。例えば宮廷の性的腐敗を描いたポルノグラフィが政治批判として意味を持ちうるのは，ヴェルサイユの様子が噂として直接伝わって来る所，すなわちパリに限られることは，ダーントン自身も認めている(40)。中央の文壇に入れなかったボヘミアン文学者が疎外感を味わうのも，同じくパリにおいてであり，中央で一旗揚げることを最初から意識していない地方の名士には

疎外感もありえないと考えられるであろう。第二は，アベ・マジのような存在も，中央のエスタブリッシュメントには入らなかったという限りにおいて，ボヘミアン文学者とみなすべきだというものである。これならばダーントンの枠組みでアベ・マジの行動を説明しうるが，その代わりにボヘミアン文学者のイメージをかなり修正しなければならなくなろう。いずれにせよ，アベ・マジのような事例をいくつか個別に取り上げ，分析を加えることにより，ダーントンの図式をさらにニュアンスに富んだものにし，さらには「どの本をいかに読んだか」という問いにも，ささやかながら光を当てうるのではないかと思われるのである。

〈注〉

(1) 本稿は，1993年10月10日（日）に京都の日仏学館ホールで行われた，関西フランス史研究会主催の公開講演会で筆者が行った報告を，大幅に加筆・修正したものである。加筆・修正を余儀なくされたのは，筆者が報告後に読了した文献をつけ加えたためもあるが，講演会で会場から出された質問が刺激となって報告内容を再検討したためでもある。筆者を招いてくださった関西フランス史研究会，および当日会場で報告を聞き，討論に参加してくださったすべての方に，この場で改めてお礼申し上げたい。

(2) Daniel Mornet, *Les origines intellectuelles de la révolution française*, Paris, Armand Colin, 1933, 邦訳『フランス革命の知的起源』上・下，坂田太郎・山田九朗監訳，勁草書房，1969・1971年

(3) Christopher Hill, *Intellectual origins of the English revolution*, Oxford University Press, 1965, 邦訳『イギリス革命の思想的先駆者たち』，福田良子訳，岩波書店，1972年

(4) 同訳書，3ページ

(5) モルネ，前掲書，第三篇の各所にこの指摘はみられるが，特には同篇第一章一，第二章一，同章三の（b），（c），同章五，結論など。

(6) Robert Darnton, *Bohème littéraire et révolution*, Paris, Gallimard/Le Seuil, 1983, 以下，Darnton（1983）と記す。

(7) id., *Edition et sédition*, Paris, Gallimard, 1991, 以下，Darnton（1991）と記す。

(8) id., *Gens de lettres gens du livre*, Paris, Editions Odile Jacob, 1992, 以下，Darnton（1992）と記す。

(9) Darnton（1983）第一論文。なお，以下の紹介においては，数カ所にわたる部分に記されていることを要約する場合もあり，特に引用箇所を限定するのが困難な場合が多いので，特定できる場合以外は，引用部分の注記は省略する。

(10) Darnton（1992）第一論文。

(11) Darnton（1983）第二論文。Darnton（1992）第四論文。

(12) Darnton (1983) 第一論文。ただし同じ指摘は他の論文や Darnton(1991)にもみられる。

(13) Darnton (1992) 第二論文および第六論文。

(14) Daniel Mornet, Les enseignements des bibliothèques privées (1750–1780), *Revue d'Histoire littéraire de la France*, t.17, 1910, pp.449–496.

(15) Darnton (1991), p. 165

(16) ibid. p. 169

(17) Keith Michael Baker, *Au trbunal de l'opinion, Essais sur l'imaginaire politique au XVIIIe siècle*, traduction de Louis Evrard, Paris, Edition Payot, 1993. 以下 Baker と記す。

(18) 以下は主に Baker, 第一論文および第六論文。

(19) Baker, 第二論文。

(20) Baker, p. 35. また同書第六論文も参照。

(21) ibid. pp. 219–220

(22) 次に紹介するシャルチエは，この点に関連してフーコーに言及している。Chartier (注25参照) p. 13

(23) Baker, 第二，第三，第五論文。

(24) ibid., 第四論文。

(25) Roger Chartier, *Les origines culturelles de la révolution française*, Paris, Seuil, 1990, 以下，Chartier と記す。

(26) Michel Vovelle, *Piété baroque et Déchristianisation en Provence au XVIIIe siècle. Les attitudes devant la mort d'après les clauses des testsments*, Paris, Plon, 1973, id., *Religion et Révolution. la déchristianisation de l'an II, Paris*, Hachette, 1976, id., *La Révolution contre l'Eglise. De la Raison à l'Etre suprême*, Bruxelles, Complxe, 1988,

(27) Chartier, pp. 229–230. なお，ダーントンにも弁護士への言及はある (Darnton (1983) p. 20) が，ダーントンは弁護士の問題を正面から扱ってはいないので，本文におけるように整理できると言ってよい。

(28) Chartier, p. 14

(29) Darnton (1983) 第一論文。なお，ここで「高級な啓蒙」と訳したものの原語は high enlightenment,「低俗な文学」は low–life of literature である。シャルチエは後者を basse littérature と訳しているので，それに倣って「低俗な」とした。

(30) Chartier, 第四章。とりわけ pp. 110–113.

(31) id., とりわけ pp. 103–110.

(32) ibid., p. 30.

(33) Baker. の序論・第一論文・第六論文は理論的枠組みの提示であり，第二論文から第五論文までが実証的ケーススタディである。ジャンセニズムをめぐる論争がきっかけとなって世論が登場したとするが，その論争に関した分析はなく，理論的枠組みとケーススタディが相互に影響をおよぼしあっているようには読み取れない。

(34) Darnton (1991) pp. 39–41.

(35) 以下のアベ・マジの生涯に関しては，特に断らない限り，Henri Jacoubet, Un académicien toulousain du dix-huitième siècle, l'abbé Magi, *Annales du Midi*, t. 41, (1929), pp. 1–

48 に依拠する。

(36) アデルはマジの生年月日を 1721 年 11 月 15 日としている。M. Adher, A propos des manuscrits de l'abbé Magi, *Bulletin de la société archéologique du Midi de la France*, 1910, p. 83.

(37) アデルは 9 月 7 日としている。Adher, id.

(38) この手稿についてはアデルの前掲論文 86－89 頁を参照。

(39) Bibliothèque de l'Université de Toulouse, Mss. 215 (187), *Catalogue de mes livres par lettre alphabétique, et tels qu'ils sont rangés sur les tablettes, cottée (sic) chacunne (sic) d'une lettre ou d'un chiffre. Magi 1764.*

(40) 1993 年 10 月 5 日の東京大学における研究会でのダーントンの発言による。